

第 20 回爬虫類と両生類の臨床と病理のための研究会 (SCAPARA)

ワークショップ 開催報告

12月1日(日)、第20回 SCAPARA ワークショップが麻布大学で、対面およびオンラインを用いたハイブリッド形式で開催されました。

参加者は現地参加者 38 名(役員、講師を含む)、オンライン参加者が約 90 名でした。

午前から午後前半は、ペットとして人気の高いフトアゴヒゲトカゲが特集されました。はじめに、フトアゴヒゲトカゲの飼育の基礎について、西 秀仁先生(国産フトアゴヒゲトカゲ ポポ)から、本種を健康に飼育するためには温度のみならず、紫外線灯、可視光線装置を各々設置して本種に最適な飼育環境を作ることが重要であるとの説明があり、この条件を満たすための、様々な工夫が紹介されました。獣医療面からは、基礎から臨床までをカバーする内容として、フトアゴヒゲトカゲの臨床病理、疾病発生概要を田向健一先生(田園調布動物病院)および赤羽良仁先生(神領ビーイング動物病院)が担当され、非感染性疾患として、近年、注視されている動脈瘤について、かなり以前より本疾患の存在に気づき、探索されていた上田謙吾先生(フォーゲル動物病院)がその概要を話されました。また、フトアゴヒゲトカゲの感染性疾患として、押さえておかなければならない重要な感染症「アデノウイルス感染症」と「皮膚真菌症」について、前者を赤羽先生と宇根有美先生(一社 どうぶつ疾病研究支援協会)、後者を高見義紀先生(パーツ動物病院)が担当し、これらの感染症の実態、特徴を解説し、臨床対応の難しさが説明されました。特集の最後には、黒木俊郎先生(岡山理科大学)よりフトアゴヒゲトカゲに由来するヒトサルモネラ感染症についての講演がありました。

一般演題として、クサガメでよく遭遇する嘴欠失を伴う口内炎の治療例、ヒョウモントカゲモドキの体腔内播種性中皮過形成、体腔水腫の原因となり得るアホロートルの精上皮過形成など3題で、カメ、トカゲ、両生類と本研究会ならではの興味深い発表でした。また、宇根先生より、「在来ヘビにおける Ophidiomycosis の確認 2024」というタイトルで、世界的に野生下ヘビの減少に関与する「ヘビカビ病」Ophidiomycosis が国内野生下のヘビでも確認されたとの緊急報告がなされました。今後、日本の野生下ヘビへの影響が懸念され、慎重な評価と適切な対応が望まれます。

最後に太田英利先生(兵庫県立大学 自然・環境科学研究所)より、「奄美大島・徳之島・沖縄東北部・西表島のユネスコ世界自然遺産登録の功罪」について特別講演が行われました。太田先生は爬虫類・両生類の分類学の権威であり、2009年まで琉球大学で教職に就いていた経歴から、沖縄諸島における爬虫類を主とする生態系の特徴を説明するとともに、これらの地域がユネスコ世界遺産に登録されたことから生じる(生じうる)事象についてわかりやすく説明され、世界遺産登録の光と影について考える大変貴重な講演であったと思いました。

最後に 本研究会のコンセプトとして、臨床、研究および展示・種の保存・生態系の保全

を活動の三本柱とすることで、ワークショップを企画しています。第20回ワークショップにおいても、その内容が十二分に含まれていたと考えますが、反省点としては質疑応答時間を用意できるような時間配分が必要であったと思います。

SCAPARA 事務局



左：一般演題の発表風景



右：宇根会長と太田英利先生